

佳作

家族がえがおになるご飯

愛知県 蒲郡市立中央小学校三年 柴田 大和

「夜ごはん、からあげ作って。」

妹とぼくが言うのと、

「からあげ、二人で作ってみなよ。」

お母さんのこの一言で、ぼくは妹と二人で夜ご飯にからあげを作ることに決めた。大すきなからあげが作れるようになると思うと、わくわくした。

家に帰り、手をあらってキッチンに入ると、

「青い手ぶくろつけて。」

早速、お母さんに言われた。手ぶくろをつけ終わると、お母さんに聞かれた。

「お肉、切ってみる。」

「うん。」

ぼくは返事をして、キッチンバサミで切ってみた。お肉は、ぶにぶにしている、つめたかった。ふくらんでいるところもあったけれど、かんたんに切れた。むずかしかったのは、一度切ってとじたはさみを、

また開くことだった。はさみは重くて、開くのにごく力がいった。でも、なんとか全て切れた。

次に、ポウルに切ったお肉と、しょうゆこうじと、んにくを入れてもんだ。妹と代わる代わる十分ぐらいもんだ。お肉はつめたく、むにむにして気持ちいいとは言えない。それでもしっかりもんでいると、お母さんから、

「お肉を一つずつ、かたくりこにしっかりとつけて。」

と言われた。ぼくは、一つずついいねいにかたくりこをつけた。かたくりこをつけるとピンクだったお肉が、白色にかわった。まるで、ドレスを着せたみたいだった。

そして、油の中に白いドレスを着たお肉をポチャンと入れた。ジュワーとあわが出て、お肉はしずんでいった。数えきれないほどあわが出てきたと思ったら、お肉は、たちまち白から黄土色に色をかえて、うかび上がってきた。ドレスをぬいで、あわのおふろに入っているみたいだった。お母さんが、あわのおふろの中から、お肉をすくい上げると、からあげになっていた。からあげの一つがにげてぼくの足に当たった。ぼくには、

「早く食べて。」

と、からあげがぼくをよぶ声が聞こえた。

家族みんな、からあげを食べた。しょうゆこうじの味が口の中に広がり、今まで食べた中で一番おいしかった。ぼくと妹が作ったからあげを食べ、家族みんながえがおになった。また作りたい、そのときのために、ぼくは作り方を思い出し、頭の中で何度もくり返して、かんぺきにおぼえた。次は、ぜったい一人で作ってみせると、心の中で決めた。

からあげを作るだけでもやるのがたくさんあった。家族五人分のご飯を作るお母さんはいへんだ。ぼくも、一人でみんなの夜ご飯を作れるようになりたい。たまごやきとおにぎりとかからあげ、それに、キュウリも切ろう。次は、ほうちょうを使って切るぞ。家族みんなが、えがおになるご飯を作るぞ。